

研究助成実施報告書

助成実施年度	2020 年度
研究課題（タイトル）	既存ストック利活用による拠点のデザインを通じた地区まちづくりの方法に関する研究
研究者名※	酒谷 粹将
所属組織※	関東学院大学 建築・環境学部 建築・環境学科 専任講師 (関東学院大学 建築・環境学部 建築・環境学科 准教授)
研究種別	研究助成
研究分野	都市計画、都市景観
助成金額	120 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

() は、報告書提出時所属先。

大林財団2020年度研究助成実施報告書

所属機関名 関東学院大学建築・環境学部
 申請者氏名 酒谷粹将

研究課題	既存ストック利活用による拠点のデザインを通じた地区まちづくりの方法に関する研究
<p>(概要) ※最大10行まで</p> <p>本研究は地域拠点という建築をつくるプロセスをまちづくり活動の一環として地域住民らと共有することが、その地域の人的ネットワークを拡げたり、地域での活動を活性化したりといった周辺のまちの変化にどのように影響するのかを研究代表者自らが関わる実践プロジェクトの中で検証することを狙いとしている。具体的には横浜市金沢区で空き家になっていた戸建て住宅を学生シェアハウス兼地域拠点としてリノベーションする「こずみの ANNEX」プロジェクトにおける活動を題材に、デザインワークショップやものづくりのイベント等の地域拠点をつくることに関わる様々な活動が街にどのように影響を与えてきたのかを分析し、明らかにした。</p>	

1. 研究の目的	(注) 必要なページ数をご使用ください。
<p>近年、社会状況の変化や人口減少の進展に伴い、全国各地で空き家・空き室が増加し、街並みや暮らしの環境、治安の悪化、火災の増加、地域コミュニティの希薄化など、様々な都市問題が発生している。そんな中、空き家をはじめとする既存ストックをまちづくりの資源と捉え、その利活用を通して様々な事業や地域の活動が展開され始めている。しかしその多くはシェアハウスやゲストハウスなど、ある限られた特定の人々のための空間としての利活用に留まるものが多く、それらが地区のコミュニティ形成やまちづくりの機運の醸成等に与える効果は決して大きいとはいえないだろう。このような状況に鑑みると、あらゆる活動の結節点としての地区の拠点づくりを題材とした空き家利活用の可能性が浮かび上がってくる。すなわち地区の中に必要と考える用途や人々が求める空間・場所、さらには持続可能な運営・管理の方法等をまちの人々自身が主体となって検討し、空き家利活用のデザインを協働的に展開するプロセス自体が地区の活性化に繋がることが期待できるのではないだろうか。</p> <p>本研究ではそうした空き家、空き室等の既存ストックを対象とし、多主体の対話を通してその利活用の提案を行う地区の拠点づくりに焦点を当て、研究者自らがまちづくりの実践活動を展開しながらそのプロセスを分析し、新たなフィードバックを得て次に続く実践へと活かしていく「アクション・リサーチ」を展開する。従って実践活動の中で様々な対話の手法を具体的に提案しながらその検証を行うことになるが、そうした実践と研究を織り交ぜた活動を重ねていくことにより、多主体の対話によるデザインの方法論を構築する。そして地区の人々へのアンケートやヒアリングを通して、一連の対話によるデザインのプロセスがその後の地区まちづくりにどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目指す。</p>	

1. 多主体の対話による拠点のデザインの実践

本研究では研究代表者がその実践や運営に関わる「こずみの ANNEX」プロジェクトを分析事例として扱い、その活動を通じたアクション・リサーチを行っている。「こずみの ANNEX」というのは横浜市金沢区の小泉（こずみ）地区にあった築約 50 年の戸建て住宅を、大学生 3 人が住まうシェアハウスでありながらその共用部を近隣の方々も利用することのできる地域拠点へとリノベーションする建築である。プロジェクトが開始した 2020 年秋の時点では 10 年ほど空き家になっていた家屋であったが、そこから調査、部分解体、耐震補強、水廻りの整備等（第一期工事）を行い、運用を開始している。また施設の運用を行いながら地域拠点としての空間を整備するための第二期工事を計画しており、その内容を近隣の住民らとともに検討するための対話の場を設け、現在まで活動を進めている。

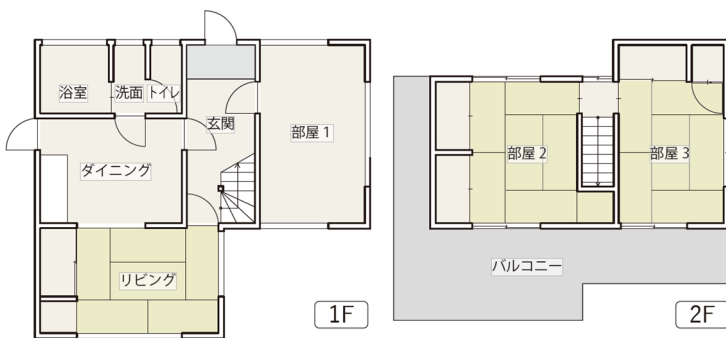


Fig. 1 既存平面図



Fig. 2 既存建物の外観

2. 多主体の対話によるデザインのためのツール・手法の開発

上記の活動の一つとして、地域の拠点として必要な空間の在り方を探究するデザインワークショップ「ANNEX をみんなで考える会」を現在までに 7 回実施した。これらのデザインワークショップの実施に向けて、いくつかの新しいワークショップのツールや手法を開発し、その実施の中で検証を行った。

一方で、ワークショップという対面による対話の場に参加することができない地域の人々にも施設の情報や整備内容について様々な意見やアイデアを集めることを目指し、オンラインで設計対象の 3D 空間の中を PC の画面上で歩き回り、体験しながら空間内の任意の箇所に言葉を残すことのできる対話ツールを開発した。

3. 拠点のデザイン実践とコミュニティ形成の関係性についての分析

上記の改修設計の内容を検討するワークショップの他に、拠点としての空間利用の上で必要な家具や道具等を自分たちの手で作るワークショップ（ANNEX をみんなでつくるワークショップ）を定期的に開催したり、子ども向けの教室・習い頃等をはじめとする各種イベントを実施したりしている。シェアハウスに住まう大学生の生活もそれに並行するが、住人らはそうした様々なイベントや行事等が実施される環境の中で地域の人々と接し、つながりを広げつつあり、そうした拠点での暮らしの中で起こる様々な出来事の一つ一つ詳細に記録し、分析することで拠点づくりを通じた地域コミュニティの形成に向けたまちづくりの戦略について考察した。

1. 多主体の対話による拠点のデザインの実践

これまでの計7回のワークショップを含む拠点のデザイン実践を通してデザインの内容がどのように移り変わってきたか、というデザインプロセスとそこに投げかけられる意見、アイデア等の人々の声との関係性について記述した。(Fig.3) 特に後述する第4~7回のワークショップではデザイン案の内容について直接的に検討することをテーマとしたため、デザインの案が複数になったり、大きくその内容が変更されたりダイナミックなプロセスを確認することができた。

また、下図にも示しているが、ワークショップ等を通してデザイン案を協働的に探究する活動はデザイン案を発展させ、より良い地域拠点の空間の実現を目的とするものではあるものの、その活動を人々とともにする中で、各種イベント・行事等の様々な新しい活動が発生していた。またワークショップも会を重ねるごとに参加者数も増加し、ワークショップという対話の場を契機に「こずみの ANNEX」についての認知度を高めることができた。デザインをデザイナーの頭の中の問題として捉えるのではなく、多くの主体が関わる社会的プロセスとして捉えることにより、それがまちや地域での人々の活動に大きな影響を与えることが明らかとなった。

2021年には横浜市が市民主体のまちづくりのための施設整備に対して支援・助成を行う「ヨコハマ市民まち普請事業」に応募し、夏と冬の二回のコンテストを通して、結果支援・助成対象として採択されることになった。その制度を活用し、2022年現在その整備(第二期工事)に向けた準備を進めている。

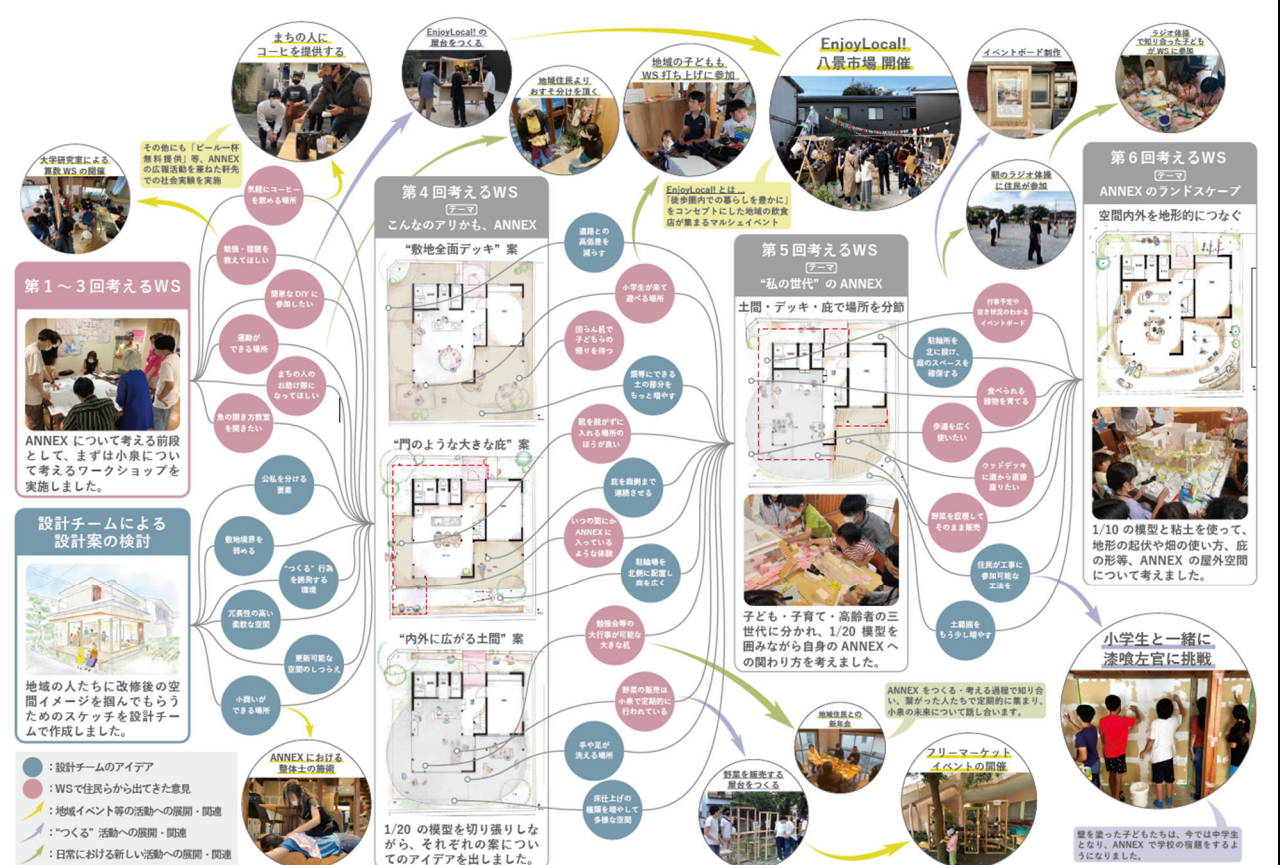


Fig.3 連続ワークショップとデザインの変遷

2. 多主体の対話によるデザインのためのツール・手法の開発

本プロジェクトで行った計7回のワークショップの内、第1～3回はこずみのANNEXの周辺エリアについて考え、まちの資源や問題点等について話し合うことを目的としたワークショップであったが、第4～7回は本格的に拠点空間のデザインを検討するためのワークショップとなった。それぞれの回ではデザインの進行状況や参加者らの属性等に鑑みながら、ワークショップの進め方やそこで用いる道具等の準備の仕方に工夫を凝らし、ワークショップデザインを行った。各回の実施概要について以下に示す。(Table 1)

Table 1 第4～7回のデザインワークショップの実施概要

テーマ：みんなのANNEXを設計しよう①「こんなのアリかも、ANNEX」



内容：
当初から公開してきた設計案のイメージを一旦払拭するために、大幅に空間イメージを変更した3つの案を提示し、案ごとにグループを分けながら1/30の模型を使って空間のデザインについて話し合った。

テーマ：みんなのANNEXを設計しよう②「“私の世代”のANNEX」



内容：
これまでのほとんどのワークショップでは子どもから高齢者まで多世代が極力入り交じるようにグループを構成したが、逆にこの回には世代ごとにグループ別れ、自分ごととしての拠点の使い方を考えてもらった。

テーマ：みんなのANNEXを設計しよう③「あねっくすでこねっくすーねんどで庭をつくろう」



内容：
こずみのANNEXの共同部の一つである庭の使い方を検討するために1/10の巨大模型を使用し、粘土を使って起伏に富んだ庭の自由な形をつくりながら、その活用方法について話し合ってもらった。

テーマ：みんなのANNEXを設計しよう④「現場でつくろう、考えよう」



内容：
整備前の最後のまとめの回としてワークショップを位置づけ、設置する庇や縁側、窓等を現地で実際のスケールでモックアップを作成しながら、詳細な設計内容を詰め、その変化の大きさを体感してもらった。

ワークショップの手法・ツールの提案・実施の一方で、ウェブブラウザを通して設計対象の空間に集まり、その中に自由に意見やアイデアを書き残すことができるオンライン対話ツールを開発した。一般的なウェブブラウザ上で拠点の空間デザインの案を3D空間として表示し、一般の人々も日常的にデザインされた空間を体験でき、対面で実施したワークショップに参加しなかった人も気軽に拠点のデザインに関われることを狙いとしたものである。指定したサーバーのURLにアクセスするだけで3Dの拠点の空間を見ることができ、その中を自由に動き回りながら好きな個所に新しくメモを設置して、デザインへの要望や新しいデザインのアイデア・意見等を書き残していくことができる。同時に複数人がその3D空間内に入ることができ、ある人が残したメモは他の誰からも見ることができ、共同的に空間のデザインについて検討を行うことが可能である。また投げ込まれたメモの内容は外部のGoogleスプレッドシートに蓄積され、そのデータがツールの起動時に毎回読み込まれる設定としているため、一旦ツールを閉じた後にも最新のメモの内容を確認することができる。以上のオンライン対話ツールの構築についての研究内容は、2022年度日本建築学会大会において発表予定である。

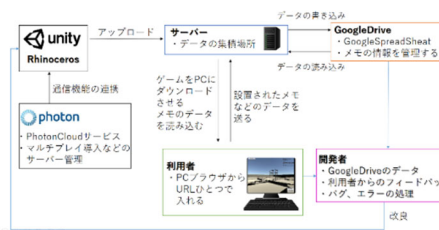


Fig. 4 構築システムの概要



Fig. 5 ツールのスタート画面



Fig. 6 空間内に浮かぶ意見やアイデア

3. 拠点のデザイン実践とコミュニティ形成の関係性についての分析

本プロジェクトの大きな特徴の一つとして、拠点整備の段階から将来その場所に関わり得る人々を巻き込み、つくるプロセスを地域に開き、共有していることが挙げられる。また第一期工事、第二期工事と工務店に依頼する大掛かりな改修だけでなく、「地域への広報のための掲示板」や「通りすがりの人がちょっと腰を下ろせるベンチ」、「既存ブロック塀の上端部を使った植栽」等、日々の暮らしの中で必要なものを少しずつつくる活動が定期的に行われている。地域拠点をつくることの実践を社会的プロセスとして地域に開くことで、そこに関わる人も徐々に増えつつあるのであるが、これまでの活動を振り返る中で仮説的に浮かび上がってきた拠点づくりとそのコミュニティの拡張のプロセスに関わる知見について述べる。

3.1 多様な役割が共存する正統的周辺参加の戦術

本プロジェクトでは第二期工事の改修設計の内容について検討する「ANNEXをみんなで考えるワークショップ」を全4回実施してきた。小学生から高齢者まで多様な世代の参加者が集まり、互いの意見や考え方を共有しながらワークショップを進めたが、そうした対話的な場面が常に続いていただけでもなく、年代ごとに固まって異なる活動を気ままに行う場面も多く見られた。しかし正統的周辺参加の観点から見ればその風景は当然のことも見え、むしろその状況を積極的に生み出す姿勢の方が自然な共同体の形成には必要だろう。実践共同体を拡張する上で重要なのは共同体の構成員がそれぞれに異なる役割を担いながらも誰しもが共同体における対等な立場にあり、互いにそれを認識し合っていることにある。拠点という建築をつくる社会的プロセスにはこうした多様な役割を設定する機会が多く存在するように思える。

3.2 積極的なモノとの触れ合い

前述の通り、本プロジェクトは地域拠点という建築をつくるプロセスを地域住民らで共有しているが、建築やそれを“つくる”という活動には必然的に多種多様な“モノ”の存在が複雑に関わってくる。「コンクリートハンマーから出る騒音のため、事前に近隣に挨拶に行く」「近所で出た廃材でベンチをつくる」「掲示板を作って設置したらそれをみた近隣の幼稚園から似た掲示板の製作を依頼される」等、つくる活動や製作物、その材料等の人間以外の主体を介して思いもよらない人と人のつながりが発生した。直接的に人とのつながりを求めることと同時にそのつながりを媒介するモノとの積極的な触れ合いが共同体の形成に強く寄与していたと考えることができよう。



Fig. 7 既存平面図

3.3 様々な実験を通じた探究的活動の展開

まちの人々がまちをつくることに向けたこれまでに持っていなかった新しい視点や価値観を得るためには、人々の“常識”を覆すような驚きを伴う経験が必要であり、そうした想定外の事態を引き起こす実験を通して新しい価値を発見する探究的活動が重要となるだろう。



(a) 道路に開く窓の設置



(b) 新しい道と部屋の関係

Fig. 7 外壁に窓をあけてみる実験

Fig.7 に示すように今回のワークショップの最終回では第二期工事で大きな開口を設ける予定の箇所に DIY で壁に大きな穴をあけ窓を設置し、道路と内部がすぐその距離につながる新しい関係性を示し、それを参加者らに体験してもらった。彼らの驚きの声とともに、街並みを変えるほどの建築的実験はワークショップの参加者に留まらず道行く人々にも少なからず拠点づくりの活動の空気感を伝えるものになったように思う。以上の研究内容も、2022 年度日本建築学会大会において発表予定である。

4. 今後の課題

(注) 必要なページ数をご使用ください。

今後の課題として、今回実施したワークショップの内容は参加者らの発話記録をはじめとする膨大な記録を残しているものの、その詳細な検証には至っておらず、データ分析をする必要がある。また現在、本プロジェクトが開始してから今日に至るまでに増加した関係者を悉皆的に調査しており、ゼロからスタートした拠点づくりとそれを中心とした地域での活動がどのように人的ネットワークを広げ、そのコミュニティを形成したかを今後明らかにしていきたい。また直接的

には当施設に関わりが無い近隣の住民らにもどのような心理的影響があるのかを把握するためのアンケート調査を実施する予定である。

以上の研究内容を踏まえ、引き続き現在も同プロジェクトの実践を今後も継続的に進める予定である。特に2022年度末には大きく拠点空間をつくりかえる第二期工事の実施を控えており、これまでの活動の蓄積を適正に空間に落とし込む必要がある。そうした大きな拠点の空間的変化の前後で地域での活動や人々の認識等がどのように変化するのかについても追って調査を進めていきたい。